

# 記紀万葉をアニメ・マンガで描こうとしてみた

## —明日香南無天踊りにおける場所・伝承・心意—

橋本 裕之

### 1 古代文化の Re:Creation

私は平成 30 年度と平成 31 年度・令和元年度の 2 年間にわたって、奈良県立万葉文化館の委託共同研究「現代社会における古代文化の二次創作—サブカルチャーが描いた記紀・万葉集—」を主宰した。共同研究の目的は記紀・万葉に取材したアニメやマンガを取り上げながら、記紀・万葉がサブカルチャーの諸領域においてどう受容されてどう発信されているのかを問うことによって、現代社会において古代文化が二次創作されている様態を民俗誌的に描き出すというものだった。二次創作は通常サブカルチャーの諸領域において既存の作品を利用して二次的に創作された事物を意味しているが、古代文化の二次創作よろしく拡張的に使用する場合、あわせてフォークロリズムの概念を参照することが有益だろう。

フォークロリズムはそもそも伝統的な民俗文化（フォークロア）が異なる文脈で使われたり変質したりする状況を意味しており、「セカンド・ハンドによる民俗文化の継受と演出」<sup>(1)</sup>とも「民俗事象が元の機能や意味をもちつづけるのではなく、新しい状況のなかで新しい機能と意味をになって行なわれること」<sup>(2)</sup>とも定義されている。したがって、古代文化の二次創作といたら、古代文化が新しい意味を付与されたり現代社会が古代文化を二次利用したりする状況を含意しており、昨今は「古代文化の Re:Creation」<sup>(3)</sup>とでも表現した方がわかりやすいかもしれない。

古代文化に対する社会的な関心が高まっている現在、古代文化の集大成とでもいうべき記紀・万葉は現代社会におけるさまざまな局面において対象化されており、二次創作の素材として大きく取り扱われている。明日香村に位置している万葉文化館もその一例であり、現代社会における古代文化の二次創作に関する典型を提供しているといえるだろう。今日、古代文化は学術的な価値のみならず、伝統文化や地域文化に対する人々の広汎な関心を満足させる材料として、もしくは地域社会がアイデンティティを再構成することに貢献する文化的な資源として、社会的な価値をも付与されることが少なくない。また、古代文化を観光資源として活用する場合も数多く見られるのである。

今、サブカルチャーに媒介された古代文化の二次創作に関する実例として、記紀・万葉に取材したアニメやマンガを恣意的に列挙してみるだけでも、後続するテキストが先行するテキストの読みを変質させたり、イメージを革新したりしている様態を浮かび上がらせることができるだろう。土田知則は間テキスト性の理論を解説した文章において、「伝統的な比較研究は先行テキストが後続テキストに及ぼす影響を一方的に特権視することで、その逆方向のベクトルを完全に無視してきた」が、「後続テキストが先行テキストの「読み」を変質させたり、そのイメージを作り変えるといったことは、ごく普通に生じている」<sup>(4)</sup>という。

たとえば、山岸涼子の『日出処の天子』は私たちが持っていた聖徳太子のイメージを劇的に更新したはずである。里中満智子の『天上の虹』は私たちが持続天皇のイメージを形成するさい決定的な役割をはたしたといえるだろう。また、私たちは新海誠の『言の葉の庭』を通して『万葉集』の魅力を発見しており、あだちとかの『ノラガミ』を通して『古事記』の世界に接近する手がかりを獲得している。こうした現象は現代の文学理論における間テキスト性の理念が個々の作品にまつわる状況として現前し

ているという意味において示唆的である。とりわけ国民的な関心を集める古代文化はエキゾティシズムとロマンティシズムを喚起する巨大な源泉として存在しているため、古代文化を二次創作したアニメやマンガに関しても社会的な影響力がきわめて大きいと考えられる。

一方、サブカルチャーに依拠した聖地巡礼は、地域振興に寄与するコンテンツツーリズムの素材として取り上げられることが多い。にもかかわらず、コンテンツとして流用される伝統文化や地域文化に対する関心は、必ずしも十分に深められていないようである。だが、古代文化を二次創作したアニメやマンガに関していえば、前述した数例を思い浮かべてみるだけでも、古代文化に対する関心を高めることに少なからず貢献していると考えられるだろう。

明日香村を代表する古墳の一つである石舞台古墳は、手塚治虫の『火の鳥ヤマト編』に登場することによってもよく知られている。だが、明日香村においてサブカルチャーに媒介された古代文化の二次創作に関する顕著な動向は今日あまり見られない。そうだとしたら明日香村に位置する万葉文化館自体が記紀・万葉に取材したアニメやマンガを制作することをめざしたらどうだろうか。そして、あくまでも将来的かつ最終的な目標でしかないが、短編アニメを万葉劇場において上映することによって、万葉文化館自体が古代文化を二次創作する主体として実践的な成果を発信することをめざしてみたいと考えたのである。

したがって、この共同研究は民俗誌的な調査研究を蓄積しながらも、いわゆる調査研究の範囲を乗り越えて社会実験の可能性を模索したといえるだろう。実際は共同研究に参加したクリエイターが生み出したラフ画や絵コンテなどを参照してほしい。いずれも経過報告の段階であるが、共同研究の成果が企画書として一定の役割をはたすことによって短編アニメが実現したさいは、万葉文化館の展示に資する可能性のみならず万葉文化館がゲートウェイとして機能して聖地巡礼を触発する可能性をも期待している。共同研究はその第一歩として位置づけられるべきものであった。

## 2 明日香村のなもで踊り

私は共同研究の一環として、委託共同研究員の一人であるみしまゆかりに依頼して、明日香村伝承芸能保存会が伝承している明日香南無天踊りに関する取材マンガを描いてもらった。というのも、明日香南無天踊りは定期的に万葉文化館の玄関前などで公演しているため、明日香南無天踊りに取材したマンガを制作することによって、万葉文化館自体が聖地巡礼の目的地として位置づけられる可能性を期待させる。といったら話を盛りすぎているかもしれないが、サブカルチャーに媒介された古代文化の二次創作を触発する小さな一歩として挑戦する意義は大きいと考えたのである。

だが、そもそも明日香南無天踊りは古代文化でも何でもない。なもで踊りは近世大和を代表する太鼓踊りであり、芸能史的に見たら室町時代以降に流行した風流踊りの一種であると考えられる。古代文化の二次創作という主題にふさわしいかどうか疑わしく感じられなくもないのだが、ともかくなもで踊りについて概略を提示しておきたい。青盛透は「踊りの成立はもう少し時代をさかのぼるものであろうが、ナモデという名称が一般化して定着するのは、ほぼ十七世紀後半と思われる。」という。そして、「こののち幕末から明治・大正・昭和初期にいたるまで多くの記録が残り、雨乞いの機能を背負いながらナモデ踊りは県内各地で伝承が続いていった」<sup>5)</sup>ことを指摘した上で、こう述べている。

かつてはナモデ踊りは雨乞い信仰と結びついて、東山中から国中、さらに吉野地方北部(吉野川流域以北)にいたるまで広大な分布圏をもち、近代まで各村落でさかんに踊られていたことがわかっている。残念ながら、それらの伝統的な踊りは奈良県の近代化が進行する過程で早くに衰退し、記録や絵馬で伝わるほかにいまは点在する痕跡しか知ることができない<sup>6)</sup>。

これは青盛が奈良県の風流踊りを概観した論文において「大和平野に広がったナモデ踊り系（太鼓踊り）」<sup>(7)</sup>の諸相に言及した箇所の冒頭であるが、青盛が別の論文において南無手踊りの特徴を列挙している箇所も参照しておきたい。青盛は「近代にいたるまで、大和平野（奈良盆地）にはたくさんの南無手踊りという踊りがあった。その名の由来はナモデ（波手・南無天）という囃しことばが踊りに付随していたからに他ならない。これが南無阿弥陀仏の意味であることは周知のことであり、しばしば念仏踊りと指摘される。しかし南無手踊りは盆踊りとしては伝承がなく、ほとんどは雨乞い願満の踊りである。」<sup>(8)</sup>という。そして、南無手踊りの特徴として4点をあげている。

- 一、ナモデという囃しことばをもっていること。
- 二、楽器は大太鼓、カンコ、早馬、鉦、ほら貝で、シデ振り（または采配）や団扇の囃し手が側踊りにつく。シャグマや唐子衣装など華やかに飾った太鼓打ちが三種類ある。
- 三、大人数の道中行列をもち、先頭に棒振りが立つ。
- 四、歌は比較的短く、組歌形式ではない<sup>(9)</sup>。

こうした特徴は明日香南無天踊りにも共有されており、明日香南無天踊りが近世に成立した可能性を想像させる。たとえば、明日香村の稲渕に鎮座する飛鳥川上坐宇須多岐比売命神社や橘に鎮座する春日神社に残るなもで踊りの絵馬は、なもで踊りがこの一帯にも伝承されていたことを示唆している。だが、明日香村の小中学生用に作成された郷土学習の副読本も「現在の南無天踊りは、神社に伝わる江戸時代に絵馬や歌本、古老の唄などから、復元されたものです。」<sup>(10)</sup>ということを明記しており、明日香南無天踊りが戦後に誕生したことが知られる。したがって、どう見ても古代に淵源するということはできないのだが、明日香南無天踊りが誕生した経緯を理解するためにも、稲渕のなもで踊りを概観しておきたい。栢木喜一は昭和49年（1974）に発行された『明日香村村史』中巻において、かつて稲渕で行なわれていたなもで踊りについて、こう述べている。

飛鳥朝時代、天皇がナブチ（栢森の奥、波多の谷あいにもメブチ、オブチがあり、そこで雨乞いされた）と伝えている）に行幸、雨乞いされた。その時の踊りと伝え、それから雨乞いのため神社で行なわれたという。本なむでは宇佐宮（飛鳥川上坐宇須多岐比売命神社）で行なったが、これは明治初年が最後ときき伝えているという。内宮（南淵請安をまつる場所にある小祠）で行なうのを「カリナモデ」といって、これは「父たちが行なったのをみた」と小倉豪三郎氏（七十七歳）はいう。／まんなかに大人が二人かかえて余るほどの大太鼓と六名の青年、その周囲を子供がとりまいて、さらにその子供の周囲を大きく男子の大人がとりまいて踊るのだという。大太鼓は竜福寺におさめてある。（中略）小倉氏は子供のころ、「カリナモデ」を内宮さんでみたことがあるというが、いま知る人はいないとのことだった<sup>(11)</sup>。

岩井宏實もカリナモデについて、昭和62年（1987）に発行された『飛鳥の民俗』において、ほぼ同様の内容を報告している。すなわち、「この踊りは、本来は雨乞満願御礼に踊るのであるが、雨乞祈願にさいして、本式のナモデ踊りより小規模におこなうものであるため、カリナモデと呼ばれ、明治の末期ごろまでしたという。」というのである。ホンナムデは明治初年が最後だが、カリナモデは明治時代の末期にも奉納されていたわけである。岩井はカリナモデが「宇須多岐比売命神社の下流にあるウチミヤ（内宮）でおこなわれ、若い衆六人が頭太鼓を打ちながら踊り、ほかのものは腹につけた小太鼓を「ハラヤボテボテ」と打ち鳴らしながら走りまわり、子供たちはチャンボコチャンボコと打ち鳴らしたという。」<sup>(12)</sup>とも述べている。また、岩井はこのカリナモデの踊り唄における歌詞を紹介している。

岡に奥山 豊浦は 池を浄めて待ちくらす  
雨たんもれ 雨たんもれ

真弓 平田や橘は 松明かざして岳参り  
雨たんもれ 雨たんもれ  
代々伝わる巻物を 捧げて祈る細川や  
雨たんもれ 雨たんもれ  
阪田 祝戸 朝夕に 竜を担いで川通い  
雨たんもれ 雨たんもれ

岩井はこの歌詞について、「飛鳥の各村における雨乞いの方法をよく物語るものである。」<sup>(13)</sup>という。カリナムデが稲渚のみならず明日香村の各大字をも網羅していた可能性をしのばせるが、稲渚のなもで踊りはかつて稲渚・栢森・畑・入谷という四つの大字が合同して飛鳥川上坐宇須多岐比売命神社に奉納していたから、他の大字が言及されているのは少しばかり不自然であるようにも思われる。一方で、栢木は明日香村文化協会が昭和55年(1980)に発行した『会誌「明日香」』第2号に掲載された「明日香村の雨乞い」という文章において、明日香村の各大字における各種の雨乞いを紹介しており、この歌詞とも一部対応する内容を確認することができる<sup>(14)</sup>。

栢木は「この「なむで踊」をいま復活しようとの村民の声がもり上ってきたと聞いて、私は誰よりも喜んでる者の一人だ。」<sup>(15)</sup>と書いているから、この歌詞が栢木の報告を再構成したものである可能性も考えておいたほうがいだろう。じっさい、ほぼ同一の歌詞は明日香南無天踊りの第2部に取り入れられており、明日香南無天踊りを明日香村のなもで踊りとして復活させるさい、いわば象徴的な役割をはたしたと考えられる。すなわち、明日香南無天踊りは明日香村民が自身のアイデンティティを再確認する契機として期待されていたのである。こうした側面はくわしく後述したい。

だが、明日香南無天踊りを復活させるプロジェクトを推進するさい最も重要だった手がかりは、嘉永6年(1853)に飛鳥川上坐宇須多岐比売命神社に奉納された絵馬だった。現在この絵馬は元興寺文化財研究所によって修復されて、明日香村民俗資料館の2階に展示されている。鹿谷勲は「描かれた太鼓踊りについては、明日香村稲渚や橿原市雲梯の事例のように、絵馬を転写して奉納した可能性もあり、聞き取りや地方文書が伴わない場合、どれだけ現実の太鼓踊りを反映させたものかどうかについては、さらに調査が必要であろう。」<sup>(16)</sup>という。

鹿谷も慎重な姿勢を見せているとおり、この絵馬は文化元年(1804)に春日神社に奉納された絵馬に類似している。また、この絵馬に描かれたなもで踊りの情景と栢木や岩井が報告するなもで踊りの内容は太鼓を打つ人数が異なっており、鹿谷が提示した可能性も十分考慮しなければならない。だが、かつて稲渚でなもで踊りが行なわれていたことはまちがいないから、この絵馬が実際の情景に触発されて描かれた可能性は大きいと思われる。岩井がこの絵馬についてくわしく説明した文章を引用しておきたい。

明日香村の稲渚の宇須多岐比売神社に、嘉永六年九月吉日奉納された絵馬は、唐子衣裳にシャグマをかぶった八人の太鼓打ちが、大きな頭太鼓のまわりを廻りながら交互に太鼓を打ち鳴らしている。そして踊りの場の中央に、唐子衣裳に花笠をかぶった早馬が九人、左手に小太鼓を持ってそれを打ちながら踊り、それに法螺貝二人、笛吹き二人が調子を合やす。その周囲に紋付着物に袴穿き、あるいは着流しに刀を差し、花笠をかぶり、色シデを振りかざして踊る中踊の衆一〇人、そのまわりに唐子衣裳・シャグマに大きなシデを背負い、腹太鼓を叩きながら踊る「かんこ」一人、そのあいだに中踊と同じ衣裳で左手に鉦を吊り下げて叩く鉦打ちが二人いる。こうした踊集団のまわりに何人かの警固が控える。そして東橘の春日神社の文化元年の絵馬と同じく、神殿に向かって神官が幣を捧げて拝んでいる。また客殿が設けられ、袴姿の武士が観覧しているのも同じである。総じてこの絵馬は東橘春日神社の絵馬の構図とよく似ていて、踊集団の構成も類似している。なお画面

上部には「奉納大明神」「雨乞願成就」の墨書銘がある<sup>(17)</sup>。

### 3 なもで踊りの復活前夜

以下、今日の明日香南無天踊りに直結する、なもで踊りの復活前夜を整理しておきたい。昭和54年（1979）、明日香村教育委員会と明日香村文化協会は『なむで踊り 中間報告』を発行して、明日香村の全戸に配布した。明日香村文化協会会長だった浦谷太郎は同書の「はじめ」において、「私は、今でも、稲淵、栢森、畑、入谷のあのみごとな棚田や、綱かけ行事などを見ると、「なも天踊り」を残した祖先のことが偲ばれて、目がしらが熱くなるのを覚えるのです。今も宇須多岐神社に奉納されてある「なも天踊り」の絵馬は、江戸時代の終り頃のものでありますが、よくその様子を描き出していて貴重なものです。」<sup>(18)</sup>と述べて、当時の気運に関する貴重な証言を記録している。

八十を越えたお年寄りのある方が、／「私の子供の頃、大人の人たちが踊っていらっしやったが、その歌の節が、耳の底に残っている。」／と、おっしゃいます。このおことばによると、「なむ天踊り」は、六、七十年前には、まだ村の行事として残っていたことになるのです。六、七十年前というと大正のはじめ頃になりますかね。惜しいことをした。これは三十年前であれば、躍ったその人たちが、まだ生存していらっしやったのに。こう思うと、過ぎ去った三十年が恨めしくてなりません<sup>(19)</sup>。

浦谷はなもで踊りを復活させるプロジェクトに関して、「只今、明日香村、飛鳥保存財団、飛鳥古京を守る会のご助成とご声援をうけて、綿密な学術・技術研究を一通り終え、その道具も一通りそろえることができました。いよいよ復活の実際事業ですが、これからが本番です。宇須多岐神社のご庇護を信じつつ、「なも天踊り」の発祥の地、稲淵、栢森、畑、入谷の方々をご協力におすがり申し挙げ、その原型をつくっていただこうと思っているのです。それが出来上がれば、これらの方々を先導として、明日香村民の「生きる力」として明日香村一ぱいにこの踊りを広めたいと思っています。／そこで、このことを明日香村民の皆さまに知っていただき、ご協力を得たいために、文化協会学術部員一同の協力によりこの「しおり」をしたためたのでございます。」<sup>(20)</sup>と述べている。

『なむで踊り 中間報告』に収められた明日香村文化協会の「なもで踊——しおり——」は「まつりのことば（歌詞）」を掲載している。歌詞はなもで踊りを復活させるさい最も重要な課題の一つであったが、この段階で「第一部 女帝 天をまつる」、「第二部 万民天にうったえる（火振り）（雲破り）（竜かたぎ）（水さらえ）」、「第三部 大いに雨降る」、「第四部 満願成就 万民歡喜報謝」に分かれている。そして、「この項目には不明の部分、不確定の点が多いので、一応の参考材料としてだけ目を通されたい。」<sup>(21)</sup>という文言が添えられていた。じっさい、この歌詞は以降、何度か改訂されている<sup>(22)</sup>。

一方、篁園超誓は昭和55年に発行された明日香村文化協会の『会誌「明日香」』第2号に「学術部調査中間報告（なむで踊りの再生）」という文章を寄せている。篁園は「なむで、なもで、南無手踊とは」という問いを提示した上で、「農業、ことに水稲耕作民族となった日本人が、日照り続きで水不足と成るごとに、神（ときには仏）に雨を祈って奉納した土俗舞踊楽のこと。由来は不明であるがとても古くて、大正年間までは続いたらしい。全国的に催されたが、かんがい施設の整備に反比例して次第に衰え、ことに当村では稲淵を中心に、畑、栢森、入谷の四大字合同の元郷社宇須多岐比売命神社（宇佐宮）での実例だけが伝承されるだけとなった。」<sup>(23)</sup>という。問題はその後である。篁園はこう続けている。

祖先の千年来の貴重な習俗を、何とかして再現、維持したいとの叫びが起って久しく、幾度も関係者間の合議が行なわれたが、遂に今日まで目的に到達できない。概要は栢木氏のお骨折りで村史に要約されている。文化協会は成立の事情からしても、村役場当局（とくに教委文化保存課など）の

手助け役として、復原のために全力を挙げることを決議していた。仕事はしかし、単純でも容易でもなくて、数年を越す息の長さを必要とするものである。ここに発足第二年目までの結果を略記して、会員各位ならびに、物心両面から絶大な鞭撻を寄せられる飛鳥保存財団、その他の篤志家への謝意をこめた報告としたい<sup>(24)</sup>。

篁園は「稲淵を代表としたが、他の三大字住民の方々も同一団体員として合せ考えていることは、付言するまでもない。地許に多数の熱心家が居られ、伝承存続の地味な努力を数十年に亘って払って来られたことが、この懸案の生命の種火であった。」という。そして、「今迄にもう何回となく、大小、公私さまざまな懇親会が持たれ、それぞれ有効であったが、とくに九月二日に、協会正副会長、ほか役職者数名と学術部員総員で稲淵会所に伺い、西内総代さん司会のもと、古老、評議員等の役員会を傍聴させて戴き、希望開陳も許されたことは、最大の収穫であった。」<sup>(25)</sup>ともいうのである。

そこで確認した資料は、(イ) 古老の方々の子少時の体験と伝聞記憶、(ロ) 歌詞とはやしの手写本三種、(ハ) 大太鼓、(ニ) 大絵馬だった。篁園は大太鼓について「実用されたもので。地許竜福寺に所蔵。」という。また、大絵馬について「嘉永六年(一八五三)筆。極彩色で写實的、相当の名筆、一見して南無手踊の写生と判り、踊手、謡手、楽人、立会人などが克明に描かれ、各人数服装、楽器、持物、所作、装置も明晰。かつては五〇人が参加したものであることを知る。」といい、備考として「村当局は、この絵馬が専門家により文化財的作品と鑑定されれば、すぐに完全修復の上で保存と決定、財団でも全面的援助との朗報あり。」<sup>(26)</sup>と書いている。これが岩井が紹介していた絵馬であることはいうまでもないだろう。

ところで、前述した「しおり」の効果は絶大だったらしい。なもで踊りを復活させるプロジェクトに従事してきた学術部は、昭和59年(1984)に発行された『会誌「明日香」』第6号に「祈って 歌って 踊って(あすか南無天踊の再生を願う)」という文章を寄せており、『なむで踊り 中間報告』に掲載された歌詞を全面的に改訂している。その経緯はこうである。

研究の糸口が見付かったと躍り上がった頃から二、三年間は、体の疲れさえ辛抱すれば作業の進捗は目に見える思いだった。その結果ある部分までの復原試案を得て印刷し、これを中間報告書の名で村内全戸に届け。住民各位のご助言をいたゞくことを期待したのが三年目のこと。こゝまでが順調なすべり出し時代といえる。／この叩き台はお粗末なのではあったが、待つこと一年半の間に相当の反応をもたらしてくれた。この仕事に好意的関心を持たれる方々から、あんな報告ではだめ、こういう事実があった、うちの辺りではこんな風に歌われていたのを思い起した、こういう材料でこうした物を作りこういう風にと扱ったそうだ、意味はつかめなかったが文句はこうあった、といった具合に数々の訂正、追加、補充などが寄せられたのである。かなり長い期間を空費したようにあせる思いに責められることもあったが、この待ち時間は決して無駄ではなかった。／なもで踊りの二焦点のひとつである第二部に、始めて生きたあすかの血が通い出したからである。教わったことを出来る限り生かして改訂した結果、中間報告の第二部は抹消されて次のように生まれ変わった<sup>(27)</sup>。

「祈って 歌って 踊って(あすか南無天踊の再生を願う)」に掲載された「改訂第二部」は、「始めて生きたあすかの血が通い出した」というとおり、岩井が紹介したカリナモデの踊り唄における歌詞を撰取しており、その他にも新しい歌詞がいくつか追加されている。また、阿部乾六も昭和62年に発行された『会報「明日香」』第9号に「明日香南無天踊り復活」という文章を寄せており、なもで踊りの歌詞を紹介している。第二部についていえば、「改訂第二部」に見られた冒頭の歌詞がなくなっており、歌詞の順序も入替わっているが、歌詞じたいはほぼ同一である<sup>(28)</sup>。

だが、阿部が昭和60年(1985)に発行された飛鳥保存財団の『季刊明日香風』第4巻第4号に寄せ

た「なもで踊り 雨乞いの行事」も「あすかなもで」の歌詞を紹介しており、前述した新しい歌詞を確認することができるにもかかわらず、第2部に岩井が紹介したカリナモデの踊り唄における歌詞が含まれていない<sup>(29)</sup>。この時期は明日香南無天踊りの黎明期だったため、歌詞もまだ確定していなかったのだろうか。阿部は歌詞が掲載された原本について、「あすかで保管され、今は復活運動のよりどころとされているのは、実はたった一冊きりの写本しかない。(写本は三冊現存しているが、対照の結果では、三人の別人が別べつに同一親本から手写したものと結論されている)」<sup>(30)</sup>という。

同様の見解は学術部によっても提示されている。学術部が同じく昭和60年に発行された『会誌「明日香」』第7号に寄せた「報告記 無形文化財継承事業（やぐも、なもで）」は、「歌詞の記録本を借用して廻り、三種の手事本を得た。比較した結果三種とも一原本から写しとったものと判定した。字や単語や短文などに些細な喰違がある程度で、全体的な差は見つからなかったの。」<sup>(31)</sup>という。その一つは昭和49年に発表された栢木の報告が紹介している「〔明治二十六年六月中旬南無手控稽古本〕と表書きした、前記小倉氏の父君で当時二十歳ぐらいだった稲淵村の寺西倉太郎氏の手控本の写し」<sup>(32)</sup>だろう。

いずれにしても、「丸本の期待は外れた反面、村々家々にほんの断章として口誦されていたものを、ひょっとしたはずみに教えていただくことがあり、大勢で手分けして歩き回っただけの効果は有った。」らしい。学術部の報告は「いくつかの例を持ち寄って、アレコレまとめ作業をくり返した後やっこのことで一節、二節と形を成して行くときの嬉しさを思い起す。同じはやし文句とみられるのに、文脈や語句などに不一致があったり、漢語とその読み方の音が合わないことがあったり、どれも統一やまとめに時間を惜しんでは成功できない。ともあれ、こうした手数の中から、本当のあすか人のしきたりが再現できた、とも考えている。古い文献の一部から、大切な参考資料の発掘されたこともあって、各種文献の探索に普段の精神集中も必要であった。」<sup>(33)</sup>というのである。こうした手がかりが残されていたからこそ、最終的に歌詞を確定することもできたのだと思われる。

#### 4 復活したなもで踊り

明日香村文化協会学術部と芸能部が昭和63年（1988）に発行された『会誌「明日香」』第10号に寄せた「明日香南無天踊復活への歩み」は、前述した中間報告について「村内の実情を参考にして、とにかく四年間に集め得た材料をまとめて四部編成とし、明日香南無天踊中間報告書なる小冊子と名付けて、村内の全世帯に洩れなく無償で贈呈した。」と述べた上で、三つの目標をあげていた。それは「資料集収作業の進捗程度の報告」、「文化協会の復元方向に対する批判や助言の提供」、「見落とされた俣の歌詞類の伝授」であり、実際に「二年間待っているうちには、少なからぬ示唆が寄せられたし、これまでの考え違いや読み誤りの訂正などが進行するなど、効果は歴然たるものであった。」<sup>(34)</sup>という。だが、曲節はそういうわけにもいかなかったようである。以下は第2節「曲節はどうなったか」の冒頭である。

歌詞がのろのろとした速度にせよ、ともかく前進を続け得たのは、村の人済にその一部を手写した文書が残っていた為であった。それに比べて何の手がかりも見つからない歌の節回しの復元は、正に不可能としか見られなかった。前途に一転の光明も感じられないのだったから。部員の精力の対象は殆ど歌詞の吟味を外れることが無かったし、その相談相手の中心は稲淵の長老小倉豪三郎氏なる方であった。書に巧みで、三種の写本の一つを数年前手写し直した許りという熱心家であって、歌詞の疑問はいつも此の方の処で解けた<sup>(35)</sup>。

「明日香南無天踊復活への歩み」は小倉豪三郎について、「正確な音感や明るい音質、年令を超越して爽な声量の持主であり、歌謡博士とも呼ばれ得る博覧強記ぶりの異材と判明した。」という。小倉は「何

年も口にしたことのなかった南無天踊第四部の猛練習にとりかゝり、二か月の間に七十五年前のうろ覚えメロディを完璧に脳裏に再現したのであった。」という。そして、「しかし此の部分のテープ録音を終えた小倉さんは断言された——私が九才か十才の頃教えて貰って節回しをどうにか頭に入れたのは、こゝに云う第四部だけで、それ以外は全然無智でしたよ——と。とはいっても強力な光源が一つ真闇の中に舞い込んで来たことは間違いない。此の命綱が果たして明日香村を救ってくれるだろうか？」<sup>(36)</sup>とも。少しばかり大袈裟であるようにも感じられるが、関係者の意欲がしのばれるだろう。

だが、状況はきわめて厳しいものだったようである。「明日香南無天踊復活への歩み」は「こうして小倉氏は踊の復元に始めての灯火を点じて下さったのであるが、その光は第四部という限り有る対象だけは明示してくれたものゝ、一歩そこから踏み出そうとすると前も後も厚い壁が立ちはだかつて、一切のものが闇黒の中に塗り籠められていることを悟らせたのだった。いくら相談してもたやすく開けそうな壁ではなかった。」<sup>(37)</sup>という。明日香南無天踊りを復活させるプロジェクトは、ここで大きく展開する。

最後に思い当たったのは東京の芝 祐靖氏であった。芝家は雅楽の家として、平安時代から宮内庁と行動を共にされた由であるが、数年前宮内庁楽部を退かれて、東京芸大講師として新しい研究に専念され、とくに正倉院と取り組んで新発見の古代楽器残欠、古代楽譜断片などを総合研究して、古代東洋式オーケストラの試演にも踏み切った方である。さ細なご縁を頼りに音曲上の顧問役を引き請けていたゞいていたものゝ、それも明日香の名有ればこそであろう。／第四部小倉テープは東京に回送され、文化協会側からの「忠実正確な復元希望」の基本線はその佐芝氏の出発線として採択されることゝなった。第四部は恐らく満願成就後に神に献げられた感謝の念が主と成りながらも、娯楽性を追求することに汲々とした近世の特徴が濃く、必ずしも明日香色豊かなものとは言いかねるのであるが、芝氏は飽く迄も約束を尊重して、全曲のどの部分にも第四部原曲の曲想が浸透するようご配慮下さった事に感謝せずには居られない<sup>(38)</sup>。

一方、第3節「振付けはどうなるのか」は未来形で書かれている。「円滑な進行の基礎を定められて、浦谷、米田両会長、吉田副会長は安堵して退任され、後を引き継いでの垣内新会長、梅谷、北村両副会長の意気込みには更に圧倒されんばかりであった。」というが、実際の状況が記録されているわけでもなかった。だが、「梅谷氏の見識の下、歌詞全体の体系化と作編曲の難事が進むと、待ち兼ねての北村副会長、島岡ご夫妻、宮村義明氏ら統率の歌唱訓練が始まる。この激しい演練が半年余り過ぎる頃には踊の振付けもそろそろまとまりかけていて、いわばこの演習行事の最終段階に移る訳である。口振付けの出来栄え如何は正に此の度の復元事業の命脈を決定するだけの比重を持っていること、万人共通の判断である。」<sup>(39)</sup>というから、前途に光明が感じられていたのだろう。

すでに長くて深い交流のある大阪在住足立米子師の招聘を文化協会としては期待しているが、司師の中広く奥深い教養と、使命完徹まで絶対に交代しない厳しい責任感と後進者一人一人の特性を逸早く見抜いて、各人が納得し、且つ自分の立場に自信と誇を持つ迄鍛え抜く指導法は、真の熱情の発露として、大多数の理解と感謝の焦点と成られるに違いない<sup>(40)</sup>。

実際にどう振り付けられたのかを知ることができないのは残念だが、「明日香南無天踊復活への歩み」は「昭和六十三年度はこうして、南無天踊復元達成の年として、明日香村史上に特記される筈と思うことである。」<sup>(41)</sup>という。そもそも浦谷は昭和54年の段階で、「[なも天踊り]」の発祥の地、稲淵、柏森、畑、入谷の方々をご協力におすがり申し挙げ、その原型をつくっていただこうと思っているのです。それが出来上がれば、これらの方々を先導として、明日香村民の「生きる力」として明日香村一ぱいにこの踊りを扱めたいと思っています。」と述べていた。したがって、明日香南無天踊りは10年間の試行錯誤を経て、ようやく「明日香村民の「生きる力」、つまり明日香村民が自身のアイデンティティ

を再確認する契機として誕生したといえるだろう。

なお、浦谷自身は「なも天踊り」と書いていたが、稲淵で「なもで踊り」という。各地でも「なもで踊り」「なむで踊り」「なも天踊り」「なむ天踊り」「南無手踊り」「南無天踊り」等、表記する方法はさまざまであったが、最終的に「南無天踊り」に落ち着いたようである。ここで明日香村文化協会が作成した発行年不明の「明日香南無天踊りの略解」を全文引用しておきたい。以上で述べてきた内容とも重複する部分が少なくないが、ほかの文献が言及していない事実も含まれており、明日香南無天踊りが誕生した当時の状況が臨場感をもって記録されており、現在の明日香南無天踊りを正しく評価する上でも重要な文献であると思われる。

明日香村橋の春日神社に文化年間と慶応2年<sup>(42)</sup>奉納の南無天踊りの絵馬があり、又稲淵の明日香川上坐宇須多伎比売命神社に嘉永四年（一八五二年）<sup>(43)</sup>に奉納された南無天踊りの絵馬があります。

早魃に苦しんだ人達が降雨を喜んでのお礼の奉納額です。

明日香南無天踊りは、飛鳥川の上流稲淵、栢森、入谷、畑の四郷に古くから伝わっていた雨乞いと万願成就のお礼の踊りで、いつの頃より始まったのか明らかではありません。大正の初めの頃、盆踊りのあと忘れない様にと踊ったことがあると村の古老の方よりお聞きしましたが、いつしか歌うこともなく又踊る人も無くなっていました。

稲淵の旧家に歌本が保存されており、踊りに使用した大太鼓が竜福寺に保存されています。

稲淵の最長老、小倉豪三郎先生（九十才、先年故人）が、「うろおほえ」だとか言いながら歌ってくださったのをテープに記録し調査に時間を費やしましたが、南無天踊りの復元に踏み切ったのである。

飛鳥保存財団の支援も得て、歌詞は原本を 歌詞補遺は、阿部乾六、作曲は小倉豪三郎先生より記録したのを参考に、稲淵谷四郷を幾度か訪れ調査した。

東京芸大講師 芝祐靖、太鼓は宮村義明、踊りの振り付けは、足立米子の各先生が担当、笛とホラかいのは島岡富雄、鉦は辻中幸弘、歌は島岡貞子と民謡教室の方々、踊りは明日香村婦人会有志の方々で編成しました。

第一部は、雨乞いの奉文

第二部は、早魃苦しむ人達の雨を乞い願う踊り

第三部は、神佛への願いが通じ国原に大雨が降る

第四部第五部は、大雨の降るを喜ぶ群衆のお礼の踊りが溢れて乱舞へと広がっていく。

明日香南無天踊りは以降も明日香村文化協会における重要な部門として活動してきたが、平成13年（2001）に南無天踊り・八雲琴・飛鳥蹴鞠・万葉朗誦の4団体が参加して明日香村伝承芸能保存会が設立された。明日香村伝承芸能保存会が平成27年（2015）に発行したパンフレット『明日香南無天踊り』は、「地元で古くから伝わっていた雨乞いと、万願成就のお礼の踊りで、いつの頃から初まったのか定かではありませんが、村の長老達の記憶によると、大正時代の初めの頃までは、盆踊りの後に踊ったと聞くが、いつしか歌うこともなく、又踊る人も無く風化していった。1980年頃より、明日香村内の各大字に伝わる資料や、旧家にあった歌本、古老の唄等を参考に復元したものである。」という。

このパンフレットは阿部乾六が原本として用いた歌詞を補遺したこと、芝祐靖が地元の長老である小倉豪三郎の記録を参照しながら作曲したこと、足立米子が踊りを振り付けたことも紹介しており、なもで踊りを復活させた当時の様子を広く知らしめる役割をはたしているといえるだろう。同じような役割を期待されている文章は、『続明日香村史』下巻にも確認することができる。前節と本節において縷々紹介してきた内容ともほぼ重複しているが、言及しなかった事実も含まれている。あらためて振り返る

意味でも、本節の最後に『続明日香村史』下巻が明日香南無天踊りを復活させた経緯を概説した部分を引用しておきたい。

明日香村文化協会の創立(昭和五十三年)により、協会学術部、阿部乾六・垣内正義らが本格的に調査を行い、復活への取り組みが始まった。創立の次の年の事業計画案に民俗芸能復活事業への援助として、稲渕大字「南無天踊り」が挙げられている。また、明日香村教育委員会と明日香村文化協会により中間報告の小誌が発行せられ、村内全戸に配布された。更に昭和五十八年発行の協会機関誌「明日香」に協会学術部から「再生近い南無天踊り」の報告文が掲載され、復活間近になっていることがうかがえる。昭和六十二年の機関誌「明日香」に学術部阿部乾六の「明日香南無天踊り復活」と題した報告文が掲載されている。この報告文は復活までのあらすじ、仮に蘇った南無天の資料など詳細に報告されている。音楽や振り付けなど多くの方々の協力を得て昭和六十一年から本格的に復活の練習が始まった。平成元年、明日香村芸能発表会において「明日香南無天踊り」が発表された。この復活は村内はもちろんのこと県外にまで反響を呼び平成二年一月二十日「ふるさとフェア'90」(東京ドーム)において公演することとなった。／村内外の各種イベントでの出演、テレビ放送など「明日香南無天踊り」は明日香村を代表する民俗芸能になってきている<sup>(44)</sup>。

## 5 古代化する明日香南無天踊り

くわしく前述したとおり、「現在の南無天踊りは、神社に伝わる江戸時代に絵馬や歌本、古老の唄などから、復元されたもので」あり、どう見ても古代に淵源するということはできないのだが、にもかかわらず明日香南無天踊りが古代文化の二次創作に関する実例を提供しているのは、飛鳥という土地柄に深く影響されているためだろう。あらゆる事柄が古代に結びつけて理解されてしまうという意味において、飛鳥は万物を古代化する場所であるともいえるかもしれない。

じっさい、橿原・高市広域行政事務組合(橿原市・高取町・明日香村)が平成25年(2013)に発行した『飛鳥地方【橿原市・高取町・明日香村】観光PRパンフレット』の表紙は石舞台古墳の写真が用いられており、その中央に「いにしえと今を結ぶ」という文言が配されている。「本パンフレットでは、古くは宮が置かれていた「飛鳥」(明日香村の地名)を中心とする橿原市・高取町・明日香村の3市町村を、歴史的な背景を踏まえ「飛鳥」と呼びます。」ということだが、その範囲をどう設定したとしても、飛鳥は文字どおり古代と現代を繋ぎ合わせる場所として提示されているわけである。また、表紙裏に書かれた文章も、飛鳥自体が現代社会における飛鳥の位置をどう認識しているかを端的に知らせている。

奈良県の中部に位置する橿原市・高取町・明日香村。この地は、長い歴史の中で日本の礎を築いてきた場所です。／日本最初の本格的都城である藤原京跡、蘇我馬子の墓といわれる石舞台古墳などの史跡や、古い町並みの残る土佐街道など、歴史遺産は数えればきりがありません。／また、名勝大和三山と曾我川、飛鳥川が織りなす豊かな自然のなかに、道端に祀られた石やお墓が点在するさまは、日本の原風景ともいわれ、私たちの郷愁を誘います。／こうした、歴史の表舞台で培われてきた遺産とともに、人々が日々の営みの中で愛おしみ、語り継ぎながら現代まで大切に育んできた飛鳥地方ならではの魅力をぜひご堪能ください。

飛鳥が日本の原風景として描かれている以上、明日香南無天踊りも古代化したとしてもおかしくないはずである。もちろん自動販売機すらも古代化してしまいかねない特異な環境が大きく作用したとしても、明日香南無天踊りを古代化させるさいは決定的な推進力が必要である。それこそが『日本書紀』に記された皇極天皇の雨乞いである。『日本書紀』は皇極天皇元年(642)8月1日の出来事として、皇極天皇が明日香村の南淵の川上に行幸して、跪いて四方を拝み、天を仰いで祈ったところ、雷鳴が轟き大

雨が降った。雨は五日間降り続き、天下は等しく潤った。国中の百姓は皆喜び、「至徳まします天皇なり」といったことを記録している。そして、前述したパンフレットは明日香南無天踊りがこの記事に依拠しつつも、南無天踊りの絵馬を参照して復活したものであることを明言しているのである。

だが、明日香南無天踊りがまだ誕生していない昭和49年に発表された栢木の報告も、「飛鳥朝時代、天皇がナブチ（栢森の奥、波多の谷あいにもブチ、オブチがあり、そこで雨乞いされたと伝えている）に行幸、雨乞いされた。その時の踊りと伝え、それから雨乞いのため神社で行なわれたという。」と述べていた。したがって、なもで踊りを皇極天皇の雨乞いに結びつける伝承は、明日香南無天踊りを待つまでもなく地元が存在していたようである。

いずれにしても、明日香南無天踊りは『日本書紀』の記事に描かれた皇極天皇の雨乞いを摂取することによって古代化したわけである。視点を逆転させるならば、古代の雨乞いがなもで踊りというかつてのサブカルチャーに媒介されて、明日香南無天踊りとして二次創作されたともいえるだろう。こうした現象は飛鳥という特異な環境によってこそ初めて実現したと考えられる。じっさい、奈良県生駒郡安堵町東安堵に鎮座する飽波神社に奉納されているなもで踊りも比較的近年に復活しており<sup>(45)</sup>、明日香南無天踊りに似たような経緯をえていると思われるが、古代化した形跡はまったく見られないのである。

飛鳥が万物を古代化する場所であることを示唆する類例を一つだけあげておきたい。万物といっても、実際は古代と現代を繋ぎ合わせる契機が必要である。『日本書紀』は允恭天皇4年（415）9月9日の出来事として、甘樫丘の辞禍戸崎（言葉の虚偽を明らかに正す場所）に釜を据えた上で、諸人に盟神探湯をさせて正邪を判断したことを記録している。そして今日、毎年4月第1日曜日に明日香村豊浦に鎮座する甘樫巫神社の立石前において盟神探湯神事が開催されている。『続明日香村史』中巻は「甘樫坐神社の盟神探湯神事」について、こう述べている。

古老の話によると、同神社で盟神探湯神事がおこなわれていたという。この盟神探湯の神事は、昭和初期におこなわれていたことになる。その後、戦中・戦後には、盟神探湯神事は途絶えて、昭和四十年代になってから復活されたという。この折に使用した湯釜は、江戸時代に用いられていたものである。そして、平成九年か、十年ごろに盟神探湯の神事の衣装が整えられて、現在に至っている。（中略）そもそも豊浦と雷の村びとたちによって、現在保存継承されている盟神探湯の神事とは、往時、正しいか、そうでない（邪）かを神の前で裁決するという裁判の一方法であり、煮えたぎった釜湯に裁決の対象者が手を入れて焼けただれなかった者が正しいとする裁判であった<sup>(46)</sup>。

すなわち、盟神探湯神事も復活されたものであり、古代文化の二次創作に関する典型を提供しているといえるだろう。しかも、現在その一部として、地元の劇団時空が盟神探湯に関する寸劇を上演している。上山好庸は劇団時空について、「明日香村の魅力を村民の皆さんに再認識していただき、誇りの持てる地域づくりを目指す。そのために村民自らが参加し、村を訪れる人々とともに万葉人の息吹が感じ取れるような出会いの場を作り上げたいと、平成十年秋に劇団「時空」が発足した。」という。そして、「大道具・小道具・衣装、そして台本まで自分たちで作り上げていくという手作り劇団を実践。演劇という形態の中で、学び創造する喜びを観客と共有し、明日香を取り巻く人々が紡いできた歴史のドラマを後の人達に伝えていきたい、という強い思い」<sup>(47)</sup>を持って、活動しているというのである。

劇団「時空」も古代文化を二次創作する主体であるといえそうであるが、「公演以外にも、観光客や修学旅行生を対象にした寸劇を行うなど、明日香を訪れる人たちをもてなす役割も果たしている。そして今、劇団「時空」にできること、それは遺跡の上で繰り広げられたであろう人々の生き様を演じることで、より鮮明な明日香のイメージを人々の中に広げていくことだと考えている。」<sup>(48)</sup>という。それは共同研究において記紀・万葉に取材したアニメやマンガを制作することをめざした共同研究の目的とも

響き合う。というよりも、古代文化の二次創作に関する先駆的な形態として高く評価すべきだろう。だが、盟神探湯神事の正体は明日香村に鎮座する神社のみならず、奈良県を含めた全国各地の神社でも広く齋行されている湯立であり、盟神探湯神事もその一つであると思われる。飛鳥坐神社の宮司である飛鳥弘文はこう述べている。

現在行っている神事は、「手」を釜に入れるようなことはしていません。「盟神探湯神事」と書いた短冊をつけた笹の葉を湯の中に入れ、形としては古代の形式を再現し、それらしく継承していると考えています。「それらしく」と言いますと何かあやふやな感じがありますが、飛鳥坐神社の宮司として先代から受け継ぎ、この神事は「口伝」(くでん)として伝わっています。／学者は記録、いわゆる資料がなければ「本当だ。」と、断言しません。あやふやなことでは学者ではありません。私は神主ですから、これまた「たぶん」という答えにしておきますが、村内の神社でも「おみゆ」として盟神探湯を行っています。ここでは「おほらい」として用いたり、「厄よけ・安全」祈願のためにこの神事を執り行っています。すべて先代から受け継ぎ、私で八十七代目を数えますが連綿と伝わっています<sup>(49)</sup>。

私自身は平成31年(2019)4月7日に実見したが、飛鳥坐神社の宮司が齋行する湯立が中心であり、寸劇はその直後に上演されていた。すなわち、甘檜丘における盟神探湯を記録した『日本書紀』の記事が存在することにちなみ、湯立は古代化されて盟神探湯に関する寸劇をも触発しているのである。古代の盟神探湯が神事と演劇に媒介されて、盟神探湯神事として二次創作されたともいえるだろう。これも「いにしえと今を結ぶ」飛鳥の特異性に由来していると考えられるのである。

## 6 古代文化のn次創作

以上、古代の雨乞いがなも踊りというかつてのサブカルチャーに媒介されて、明日香南無天踊りとして二次創作された過程を見てきた。そう考えてみたら、共同研究が手がけてきたプロジェクトと明日香南無天踊りを復活させるプロジェクトは奇妙に響き合いはじめる。すなわち、どちらも古代文化を二次創作するという意味において、少なからず共通しているようにも思われるのである。私は第2節の冒頭において、「明日香南無天踊りは定期的に万葉文化館の玄関前などで公演しているため、明日香南無天踊りに取材したマンガを制作することによって、万葉文化館自体が聖地巡礼の目的地として位置づけられる可能性を期待させる。」と書いた。一方、明日香南無天踊りも高齢化が進み、新しいメンバーを確保することに苦労しているという実情をうかがった。したがって、明日香南無天踊りに取材したマンガは、双方の未来に貢献する資源として効力を発揮するかもしれない。

みしまに描いてもらった明日香南無天踊りの取材マンガ「明日香南無天踊りの復活」(資料1)を見ておきたい。みしまが執筆した文の主要な部分のみ紹介する。絵は現物を実見していただけたら幸いである。これは令和元年(2019)9月28日に万葉文化館玄関前で明日香南無天踊りを実見した後、共同研究の一環として会議室において明日香南無天踊りのメンバー数人に対するインタビューを実施した成果である。本稿で論述してきた内容とも重複しているが、明日香南無天踊りの概要を振り返るためにも、あらためて引用してみる。

南無天踊りとは、明日香村や安堵町、王寺町など奈良県各地に古くから存在していた雨乞いの踊りです。／明日香村においては、江戸時代に明日香村橋の春日神社や稲渚の飛鳥川上坐宇須多岐比売命神社へ奉納された絵馬に当時の南無天踊りの様子が描かれています。／南無天がいつ頃から始まったのか、由来は定かではありません。／大正時代初期までは盆踊りの後に踊ることもあったようですが、徐々に廃れて一時は完全に途絶えたそうです。／その南無天踊りを復活させ、改めて次

世代に継承していこうという動きが一九八〇年代に起こります。／神社に奉納された絵馬や明日香村内の各大字に伝わる資料、旧家にあった歌本や古老の唄などを参考に、有志の地元民が専門家の協力を得て当時の踊りを再現しました。／さらに、皇極天皇が雨乞いをされたという日本書紀の逸話にも取材し、アレンジを加えて再編成したのが現在の「明日香南無天踊り」なのです。

そして、みしまは「二〇一九年現在、明日香南無天踊りは以下の五部から構成されています。」と述べて「第一部／皇極天皇が天に雨を乞う」、「第二部／早に苦しむ民が雨を乞い願う」、「第三部／神仏への願いが通じ大雨が降る」、「第四部・第五部／雨に歓喜する民衆が感謝を舞う」を列挙した上で、取材者が「この第一部は他の地域の南無天踊りにありませんよね」という質問を明日香村伝承芸能保存会のメンバーに投げかける場面を描いている。この質問に対する回答は「はい、第一部は日本書紀の逸話を表現した創作部分で、「明日香南無天踊り」の特徴です。／太古の人々も、後の時代の人々も、恵みの雨を欲する気持ちに大きな違いはなかったはず。／時代を超えて共有されるその思いを表現したかったんです。／我々にとっては、第一部があってこそその南無天踊りなんですよ」というものである。

これはインタビューにおいて明日香南無天踊りのメンバーが最も強調した部分だった。「時代を超えて共有されるその思い」は次節においてくわしく検討したいが、みしまも取材マンガを「明日香南無天踊りは、飛鳥時代と江戸時代、そして現代に生きる我々の合作と言えるのかもしれない。」という文言によって閉じている。古代文化として二次創作された明日香南無天踊りをマンガの題材として取り上げることは、明日香南無天踊りの二次創作のみならず古代文化のn次創作をも意味しているといえるはずである。n次創作についても説明しておこう。浜野智史は「一つの作品が基点となって派生作品（二次創作）が生み出されるだけでなく、派生作品（二次創作）がまた別の作品（三次創作）にとっての部品（モジュール）としての役割をはたしていき、その三次作品がまた別の……という一連のプロセスを、「N次創作」と呼ぶことができます。」<sup>(50)</sup>という。

また、岡本健はこうした現象が観光にも見られることを指摘して、「個人個人が情報発信を行い、それによって構築される観光を「n次創作観光」とし」ている。岡本は「元々の概念は「N次創作」とNが大文字であったが、「個人個人の情報の編集や発信の集積によって観光が構築されていくイメージをより鮮明に示すため「n次創作観光」と、小文字のnを用いたい。」<sup>(51)</sup>と述べている。したがって、本稿においても両者の所説を継承して、古代文化の二次創作が次々に展開する現在進行形の現象を分析するさい、古代文化のn次創作という表現を用いる。したがって、みしまに手がけてもらった明日香南無天踊りの取材マンガは、サブカルチャーに媒介された古代文化のn次創作をも触発する小さな一歩を意図していたのである。

そうだとしたら、古代文化のn次創作は従来もさまざまなメディアに媒介されて進行していたはずである。だからこそ明日香南無天踊りを待つまでもなく、なもで踊りを皇極天皇の雨乞いに結びつける伝承が稲渕において形成されたのだろう。雨乞いといえば、明日香南無天踊りはなもで踊り以外にも雨乞いの要素を摂取している。それは第2部に登場する竜の造り物である。栢木はかつて明日香村の阪田と祝戸に伝えられていた雨乞いの行事について、こう述べている。

ひでのり時、坂田〔ママ〕と祝戸とともに、神社で藁で大きな長い蛇体を作り、区長が先頭にたつて領内の水田を引きまわし、祝戸橋のたもとにあるホーラクダブ（ホーラクサンともいう）につけ、再び神社まで運ぶ。そして本社から大字の方を向けてまつておく。そうすると必ず雨が降ったという。この行事は戦前にやめ、いまは昔やったことをわずかに記憶する人がいるにすぎない<sup>(52)</sup>。

おそらく明日香南無天踊りを復活させるさい、なもで踊り以外にも明日香村に伝わる雨乞いに関する要素を貪欲に摂取したのだろう。第2部に登場する竜の造り物はなもで踊りの絵馬にも描かれていない。

まったく異なる要素であるといわざるを得ないが、雨乞いという心意は明日香南無天踊りとも共通しており、皇極天皇の雨乞いに結びつけることも可能である。そう考えたら、竜の造り物が明日香南無天踊りに組み込まれていてもおかしくない。岩井も阪田と祝戸の雨乞いについてくわしく報告している。栢木が報告した内容に重ならない部分も見られるので、該当する部分を紹介しておきたい。

阪田と祝戸は一緒に雨乞をした。各戸から藁を以て葛神社に集まり、新竹を芯にして太さ二尺五寸、長さ一丈五尺ほどの藁の大蛇をつくる。これを若い衆が総出でかつぎ、阪田と祝戸の領内を練り歩き、飛鳥川の湖にほうり込んで踏んづけて大蛇を水びたしにし、それを再びかついで祝戸から阪田へと練り歩き、神社に戻り、こんどは「宮さんを巻く」といって、神社の周りを練り歩く。お練りの道中は、鉦や太鼓を叩き鳴らしながら、「雨タンモレ、タンモレ、ジイダイボ、クモニシルケガナイノカイ、アッテモノウテモフラシテクレ……」と唱える。また、クモヤブチといって、村池の堤のところ集まって、大トンドを焚いて般若心経百巻をくったこともあるという。島之庄でも、藁で大蛇をつくり、祝戸川まで送り、そこに大蛇を漬けていくと雨が降るとい<sup>(53)</sup>。

以上、本稿は飛鳥という場所と雨乞いという伝承が古代と現代を繋ぎ合わせる契機として決定的な役割をはたしていることを示唆してきた。古代文化のn次創作も両者が合流する地点においてこそ強力に推進することができると考えられるが、こうした過程においても一つだけ検討しなければならない要素が残されている。それは雨乞いに託された心意が古代と現代を繋ぎ合わせるさいはたす役割である。

## 7 共有される心意

私どもの祖先が、どんな気持ちで、どんなに生きぬいてきたかを知ることが、大切なことだと思います。さらに、それよりも、その姿をそのまま今の世に再現できたら、それこそ、もっと素晴らしいことだと思うのです。今でも、吾が明日香村は、農耕を主として生活をつなぐ純農の村であるということができましよう。その農耕による生活は、ひょっこりと私たちの前に降ってきた生活ではありませんまい。私たちの祖先が、朝星、夜星、土にかじりつき、ありったけの汗を土にしみつかせて生きぬき、親から子へとつないでくれた生活であることは、誰よりも当の私たちが身にしみて知っていることをございませう。今とちがって私たちの祖先の米づくり、野菜づくりの生活は、もっともと深刻なものです。ありました。そして、その生活の命の綱は雨でした。もし、降らねばならない時に雨が降ってくれなければもうおしまいです。ぷつりと命の綱が切れてしまうのです。／「天の神さま、どうか雨を降らせてください。お願いします。どうか私たちを見殺しにしないでください。」こうした、血の出るような願いの声が、／「なも、天」／なのです。そして、命がけで天にお願いした姿が、／「なも天踊り」／なのです。こんな腸のちぎれるような「声」や「踊り」が又とありましようか。かなしいですね。／「雨降れ、たんもれやい、雲にしるけがないかいな。」と、火ふりをなさった、村の人々の声やお姿が、子供心にやきつき、私は、今でもはっきりと覚えています。／もし、願いがかなって、雨がたんまり降ろうものなら、それこそ、天にも昇りたいような嬉しさで、村中がわきかえり、手の舞い、足の踏むところを知らず、／「天の神さま、ありがとうございます。ようこそ、私たちの命をつないでくださいました。」／こうした感謝とよろこびの声が、又／「なも、天」／となったのです。そして、手ばなしで感謝し、喜ぶ姿が、又／「なも天踊り」／となったのです。こんなに、気でもちがったような、感謝と喜びの「声」や「踊り」が又とありましようや。涙が出やしませんか<sup>(54)</sup>。

これは浦谷が明日香南無天踊りを復活させる過程で明日香村民に向けて記した文章の一部である。しかも、浦谷は「現在は、雨乞いの時代ではないですね。それなのに私たちは「なも天踊り」を復活し、

現代のものとしたいのです。」という願望を書きつけた上で、「私たちの祖先が、「なも天」と切々天に向ってお願いしたあの姿を復活し、それを通じて、明日香村民としての民族自覚を呼びもどし、どうしても、この社会情勢の中に正しく生きぬこうとする「新しい力」をこの明日香の土によみがえらせたいたからです。そして、それは、吾々の祖先の願いでもあると思うのです。」<sup>(55)</sup>という。

ところで、委託共同研究員の一人でありクリエイターとして参加したしもかわらゆみは、オケノミコとヲケノミコという二皇子の美談を紹介した上で、「アニメーションのように物事をきわめて具体的に表現する手法においては特にそういう普遍的・心情的なものは有効だと思うのである。」<sup>(56)</sup>と述べている。そして、しもかわらは「研究員さんから「当時の方が現代人と同じ感受性を持っていたとは考えにくい」との指摘もいただいたが、形のない心の様は想像する以外にないので、ここは「現代日本のわたしたちとも共通する心理的回路を持っていたと仮定」して、作業を進めた。」<sup>(57)</sup>ともいう。

しもかわらの所説は短編アニメを制作するさい愛情のような「普遍的・心情的なもの」が大きな役割をはたす可能性を示唆するものだったが、明日香南無天踊りを復活させるさいも雨乞いに託された「普遍的・心情的なもの」、つまり切迫した生存感覚に依拠した願い——文字どおり渴望する心意である——が古代と現代を繋ぎ合わせる契機として、大きな役割をはたしていたはずである。もちろん浦谷が「現在は、雨乞いの時代ではないですよ。」というのは当然である。明日香村文化協会の学術部を務めた阿部は「明日香南無天踊り復活」という文章において、なもで踊りが忘れられてしまった事情を分析して、代表的なものを四つ列挙している。

- (イ) 土木技術の向上で、水利用の効率化が目立った。
- (ロ) 自然気象は人間の願望で左右できまいとの新認識。
- (ハ) 個人主義が広まり、村民団結の習慣が薄らいだ。
- (ニ) 新しい芸能活動に心惹かれる人々が多くなった<sup>(58)</sup>。

いずれも現代社会において顕著な課題であるといえそうだが、だからこそ明日香南無天踊りを復活させるプロジェクトは雨乞いに託された「普遍的・心情的なもの」を通して、「明日香村民としての民族自覚を呼びもどし、どうしても、この社会情勢の中に正しく生きぬこうとする「新しい力」をこの明日香の土によみがえらせたいた」と考えたのだろう。そういえば、明日香南無天踊りがまだ誕生していない昭和59年に発表された「祈って 歌って 踊って（あすか南無天踊りの再生を願う）」にも、具体的な目標の一つとして「過去に亡んだ雨乞いとは考えず、生命保持の為の清らかな水への執念は人類永遠不変の実相であると認識し直す必要がある。今でも水の不安は変わっていない。」<sup>(59)</sup>という一節が記されていた。

一方、阿部も「水を求めるためにはわらにもすがろうとする農民が、史実か否かを確かめるすべはなく、この土地に古くから伝承されて来た雨乞い成功説話を取入れた苦衷など論議あろうが、この芸能の復活を口火として同一目的達成の為に人間同士が団結する喜びを再発見できないものかとの眩きも村に在る。」<sup>(60)</sup>と述べていた。阿部の所感はいかにも奥ゆかしい。だが、浦谷や阿部が明日香南無天踊りを復活させるプロジェクトを通して、明日香村民が自身のアイデンティティを再確認するのみならず、一致団結する愉悦を再発見することを切望していたことは明白である。

そして、みしまは自身が描いた取材マンガにおいて、的確にも「太古の人々も、後の時代の人々も、恵みの雨を欲する気持ちに大きな違いはなかったはず。／時代を超えて共有されるその思いを表現したかったんです。／我々にとっては、第一部があってこそその南無天踊りなんですよ」という当事者の所感を汲み取っている。この部分は雨乞いに託された心意が古代と現代を繋ぎ合わせる契機として決定的な役割をはたした消息を知らせており、明日香南無天踊りの特異な位相を表現しているようにも思われるのである。

本稿は明日香南無天踊りを古代文化のn次創作に関する一例として位置づけた上で、場所・伝承・心意がはたす役割を検討してきた。共同研究が手がけてきたプロジェクトと明日香南無天踊りを復活させるプロジェクトが古代文化を二次創作するという意味において少なからず共通しているとしたら、古代文化として二次創作された明日香南無天踊りをマンガの題材として取り上げることは、明日香南無天踊りの二次創作のみならず古代文化のn次創作をも意味しているといえるだろう。すなわち、みしまに手がけてもらった明日香南無天踊りの取材マンガは、サブカルチャーに媒介された古代文化のn次創作をも触発する小さな一歩を意図していたのである。この取材マンガが明日香南無天踊りと万葉文化館という双方の未来に貢献する資源として効力を発揮することを期待している。

最後に一つだけ興味深い事実を付け加えておきたい。最近ようやく実見する機会を得たのだが、祝戸の農事実行組合が平成23年(2011)、阪田に鎮座する葛神社に明日香南無天踊りの絵馬を奉納している。皇極天皇の雨乞いもしっかり描かれている。祝戸に在住する画家、川本恵が描いたものだが、これも明日香南無天踊りの二次創作のみならず古代文化のn次創作をも意味しているといえるだろう。明日香南無天踊りの取材マンガは孤立した現象でも何でもない。明日香南無天踊りはみしまも「飛鳥時代と江戸時代、そして現代に生きる我々の合作と言えるのかもしれませんが。」と述べていたが、飛鳥という場所と雨乞いという伝承、そして渴望する心意をも古代と現代を繋ぎ合わせる契機として動員することによって、時代を超えて今日でも古代文化のn次創作に向けて開かれているのである。

#### 〔謝辞〕

私は平成31年4月27日、令和元年9月28日、令和元年10月26日の3回、万葉文化館において明日香南無天踊りを実見した。また、平成31年4月27日に明日香南無天踊りのメンバーである岡崎義男さん、古川良則さん、寺西和子さんに対して、令和元年9月28日に岡崎義男さん、古川良則さん、福井邦子さん、嶋村典里さん、岡本明子さんに対してインタビューを実施した。席上、興味深い談話を聞かせてくださったのみならず、各種の資料も提供して下さったことに深く謝意を表したい。とりわけ創設メンバーである寺西和子さんの談話は、明日香南無天踊りに対する強い熱意を感じさせて感銘深いものだった。一方、みしまゆかりさんは私の依頼に応じて、明日香南無天踊りに関するとても素敵な取材マンガを完成させてくださった。やはり深く謝意を表したい。

#### 注

- (1) 河野眞「フォークロリズムの生成風景——概念の原産地への探訪から——」『フォークロリズムから見た今日の民俗文化』、創土社、2012年、88頁。
- (2) 同「民俗文化の現在——フォークロリズムから現代社会を考える——」『フォークロリズムから見た今日の民俗文化』、107 - 108頁。
- (3) 本共同研究の成果を発表した第17回万葉古代学公開シンポジウムに「古代文化のRe:Creation—記紀万葉をアニメ・マンガで描こうとしてみた—」という名称を冠した理由もこうした経緯に求められる。
- (4) 土田知則「『間テキスト性』の詩学」土田知則・青柳悦子・伊藤直哉『現代文学理論—テキスト・読み・世界—』、新曜社、1996年、170 - 171頁。
- (5) 青盛透「奈良県の風流・盆踊り—その歴史と芸態—」奈良県教育委員会編『奈良県の民俗芸能1』、奈良県教育委員会、2014年、24頁。
- (6) 同論文、25頁。

- (7) 同論文、25 頁。
- (8) 同「丹生の太鼓（古）踊りと奈良県の南無手踊り—芸態と分布をめぐって—」奈良県教育委員会事務局文化財保護課編『丹生の太鼓踊り調査報告書』、下市町文化遺産活用実行委員会、2017 年、21 頁。
- (9) 同論文、22 頁。
- (10) 明日香村教育委員会編『小中学生のための郷土学習 明日香』（第 2 次改訂版）、明日香村教育委員会、2019 年、53 頁。
- (11) 栢木喜一「宮座と講」明日香村史刊行会編『明日香村史』中巻、明日香村史刊行会、1974 年、602・608 頁。
- (12) 岩井宏實「雨乞い」飛鳥民俗調査会編『飛鳥の民俗』、財団法人飛鳥保存財団、1987 年、61 頁。
- (13) 同論文、62 頁。
- (14) 栢木喜一「明日香村の雨乞い」『会誌「明日香」』第 2 号、明日香村文化協会、1980 年、44 - 46 頁。  
栢木は別の機会にも同様の内容を扱っている。栢木喜一「明日香村の水の信仰」飛鳥民俗調査会編『明日香の風土』、財団法人飛鳥保存財団、2003 年、参照。
- (15) 同「明日香村の雨乞い」、42 頁。
- (16) 鹿谷勲「描かれた太鼓踊り—奈良県内の奉納絵馬を中心に—」奈良県教育委員会編『奈良県の民俗芸能 1』、107 頁。
- (17) 岩井宏實「風流踊の芸態と伝承基盤——大和の太鼓踊を中心に——」『地域社会の民俗学的研究』、法政大学出版局、1987 年、126 頁。
- (18) 浦谷太郎「はじめに——「なも天踊り」の復活について——」明日香村教育委員会編『なむで踊り 中間報告』、明日香村教育委員会・明日香村文化協会、1979 年、3 - 4 頁。
- (19) 同論文、4 頁。
- (20) 同論文、5 頁。
- (21) 明日香村文化協会「なもで踊り——しおり——」明日香村教育委員会編『なむで踊り 中間報告』、8 頁。
- (22) 管見した範囲で時系列に沿って列挙しておきたい。①明日香村文化協会「なもで踊り——しおり——」明日香村教育委員会編『なむで踊り 中間報告』、8 - 24 頁。②学術部「祈って 歌って 踊って（あすか南無天踊の再生を願う）」『会誌「明日香」』第 6 号、明日香村文化協会、1984 年、48 - 48 頁。③「なもで踊り 雨乞いの行事」『季刊明日香風』第 16 号、財団法人飛鳥保存財団、1985 年、47 - 48 頁。④阿部乾六「明日香南無天踊り復活」『会誌「明日香」』第 9 号、明日香村文化協会、1987 年、52 - 85 頁。④は集大成とでもいうべきものであり、楽曲の譜面が 28 頁にわたって掲載されている。だが、現在は短縮して演じる場合が多いようである。勝川喜昭「明日香村伝承芸能について」『会誌「明日香」』第 28 号、明日香村文化協会、2006 年、23 頁、参照。
- (23) 篁園超誓「学術部 調査中間報告（なむで踊の再生）」『会誌「明日香」』第 2 号、明日香村文化協会、1980 年、38 頁。
- (24) 同論文、38 頁。
- (25) 同論文、38 頁。
- (26) 同論文、39 頁。
- (27) 学術部「祈って 歌って 踊って（あすか南無天踊の再生を願う）」、48 頁。
- (28) 阿部乾六「明日香南無天踊り復活」、53 - 54 頁、参照。
- (29) 同「なもで踊り 雨乞いの行事」、47 - 48 頁、参照。

- (30) 同論文、47頁。
- (31) 学術部「報告記 無形文化財継承事業(やぐも、なもで)」『会誌「明日香」』第7号、明日香村文化協会、1985年、43頁。
- (32) 栢木喜一「宮座と講」、602頁。この写本は栢木が全文を紹介している。同論文、602 - 608頁、参照。また、この写本は『続明日香村史』中巻にも再録されている。奥野義雄「稲淵・栢森の綱掛け神事となもで踊」明日香村編『続明日香村史』中巻、明日香村、2006年、525 - 531頁。
- (33) 学術部「報告記 無形文化財継承事業(やぐも、なもで)」、44頁。
- (34) 明日香村文化協会学術部・芸能部「明日香南無天踊復活への歩み」『会誌「明日香」』第10号、1988年、55 - 56頁。
- (35) 同論文、56頁。
- (36) 同論文、56頁。
- (37) 同論文、56頁。学術部は芝祐靖に移植した経緯についても記録している。学術部「報告記 無形文化財継承事業(やぐも、なもで)」、44頁、参照。
- (38) 明日香村文化協会学術部・芸能部「明日香南無天踊復活への歩み」、56 - 57頁。
- (39) 同論文。57頁。
- (40) 同論文、57頁。
- (41) 同論文、57頁。
- (42) 正しくは慶応3年(1867)である。
- (43) 正しくは嘉永6年(1853)である。
- (44) 明日香村編『続明日香村史』下巻、明日香村、2006年、440頁。東京ドームにおける「ふるさとフェア'90」の様子は脇本澄子がかくわしく報告している。脇本澄子「南無天踊り」『会誌「明日香」』第12号、明日香村文化協会、1990年、55 - 56頁、参照。
- (45) 奈良新聞社編『大和の神々』、奈良新聞社、1996年、164 - 165頁、参照。また、松井良明と橋本紀美は安堵町のなもで踊りを概観した論文を発表している。松井良明・橋本紀美「奈良県安堵町における「なもで踊り伝承」」『体育の科学』第46巻第10号、杏林書院、1996年、参照。
- (46) 奥野義雄「甘樫坐神社の盟神探湯神事」明日香村編『続明日香村史』中巻、519 - 520頁。
- (47) 上山好庸「劇団「時空」」明日香村編『続明日香村史』下巻、442頁。
- (48) 同論文、443頁。
- (49) 飛鳥弘文「盟神探湯神事について」『会誌「明日香」』第14号、明日香村文化協会、1992年、48 - 49頁。
- (50) 浜野智史『アーキテクチャの生態系—情報環境は以下に設計されてきたか—』、NTT出版、2008年、249頁。
- (51) 岡本健『n次創作観光—アニメ聖地巡礼／コンテンツツーリズム／観光社会学の可能性』、NPO法人北海道冒険芸術出版、2013年、43頁。
- (52) 栢木喜一「宮座と講」、609頁。
- (53) 岩井宏實「雨乞い」、61頁。
- (54) 浦谷太郎、前掲論文、2 - 3頁。
- (55) 浦谷太郎、前掲論文、4頁。
- (56) しもかわらゆみ「短編アニメの可能性を模索してみた」奈良県立万葉文化館編『奈良県立万葉文化館第17回万葉古代学公開シンポジウム 古代文化のRe:Creation—記紀万葉をアニメ・マンガで描こうとしてみた—』、奈良県立万葉文化館、2020年、12頁。

記紀万葉をアニメ・マンガで描こうとしてみた（橋本）

- (57) 同論文、10 頁。
- (58) 阿部乾六「明日香南無天踊り復活」、51 頁。
- (59) 学術部「祈って 歌って 踊って（あすか南無天踊の再生を願う）」、52 頁。
- (60) 阿部乾六「なもで踊り 雨乞いの行事」、47 頁。

# 明日香南無天踊りの復活

明日香村においては、江戸時代に明日香村橘の春日神社や稲渚の飛鳥川上坐宇須多岐比売命神社へ奉納された絵馬に当時の南無天踊りの様子が描かれています。



飛鳥川上坐宇須多岐比売命神社の絵馬

南無天踊りとは、明日香村や安堵町、王寺町など奈良県各地に古くから存在していた雨乞いの踊りです。

**年表**

室町	江戸	明治	大正	昭和
----	----	----	----	----

南無天踊りがいつ頃から始まったのか、由来は定かではありません。

起源はナゾ

奈良各地の神社に南無天踊りを描いた絵馬が奉納される

大正初期までは踊られていた?

風化

大正時代初期までは盆踊りの後に踊ることもあったそうですが、徐々に廃れて一時は完全に途絶えたそうです。

さらに、皇極天皇が雨乞いをされたという日本書紀の逸話にも取材し、アレンジを加えて再編成したのが現在の「明日香南無天踊り」なのです。

その南無天踊りを復活させ、改めて次世代に継承していこうという動きが一九八〇年代に起こります。

神社に奉納された絵馬や明日香村内の各大字に伝わる資料、旧家にあった歌本や古老の唄などを参考に、有志の地元民が専門家の協力を得て当時の踊りを再現しました。

# 資料1 「明日香南無天踊りの復活」



2 取材協力: 明日香村伝承芸能保存会  
写真提供: 奈良県